

巻頭言

背景共有と関係構築の重要性： 災害復興における参加観察から

デレーニ・アリーン（准教授）

私たち研究者は、データ収集のための様々な調査手法に精通していても、実際は慣れているいくつかの手法に頼ることが多い。私が最も頻繁に用いるのは聞き取り調査だが、研究者になった当初は、対象となるグループに参加して何らかの役割を果たしながら観察する「参加観察法」が、未知の慣行や活動を理解する上で重要だった。先ごろ、宮城県沿岸部の住民から災害支援グループへの参加を誘われ、再び参加観察者となる機会を得た。

きっかけは2024年元旦に石川県を襲った能登半島地震だった。この地震は、宮城県沿岸部の人たちに2011年のつらい経験や記憶を蘇らせ、直ちに援助のための行動を起こす人々もいた。一方で彼らは、石川の人々が現在そして将来直面する状況や、外部からの長期にわたる支援が重要なのを理解していた。そこで、2011年に七ヶ浜町（宮城県）への支援のために七里ガ浜（神奈川県）の住民らにより設立された七七支援隊が中心となり、七尾市を支援する計画が立てられた。私は協力者かつ参加観察者としてそこに加わった。

参加観察は、食事を取りながらの最初の企画会合から始まり、その後も飲食を共にしながらの検討、新しい連絡用アプリを使った議論、吹雪や雷雨の中、七尾市に向かう長距離ドライブなどを通じて行われた。支援の面では、我々は瓦礫撤去、七ヶ浜産の米や海苔の寄付、仮設住宅での最初の住民参加イベントの主催、能登半島産の牡蠣を七ヶ浜で販売することによる地元漁師への支援、中島（七尾）の祭りにおけるボランティア活動などを行った。最後の訪問時に、丘の斜面から泥水が流れ出し、走行中の道



中島町（石川県七尾市）の避難者のために寄付された七ヶ浜産の米や海苔を梱包する七七支援隊チーム七ヶ浜



石川県に向けて出発する七七支援隊チーム七ヶ浜

路が水浸しになっていく様子を目撃し、仲間たちの「ヤバイな！」という言葉を目にしながら、「災害復興の研究中に被災するとはなんて皮肉なことだ」「東北大学から安否確認の通知は来ないだろうな」などと思ったことを記憶している。

こうした経験を共にすることでグループの一員と認められ、信頼が強まることにより、聞き取り調査だけの場合よりもより深い視点が参加観察では得られる。今回の参加観察の最も重要な成果は、地元の人々にとって“つながり”がいかに重要であるかが示されたことだ。七七支援隊の人たちは常に、人と人のつながりに言及し、その重要性を七尾の住民に伝える必要があると語っていた。私は、共有された3.11の経験によって人々がいかに強く結びついたのかを深く理解した。これらは知識としては知っていても、その本質は体験者の懐に深く飛び込まなければ十分には理解できないのかもしれない。3.11に見舞われた地域を研究対象としながら実体験をしていない自分に対し、今回の経験は、社会的なつながりがいかに復興の大きな力になるかを教えてくれた。



contents

- 1 巻頭言
- 2 定年退職にあたり
- 4 私の東北アジア研究
- 5 新任ごあいさつ
- 5 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
- 8 活動風景



定年退職にあたっての ささやかな思い出話ほか

明日香 壽川 中国研究分野（教授）



あすか・じゅせん ● 東京大学大学院工学系研究科修士（学術博士）。東北大学東北アジア研究センター助教授を経て、2004年から現職。専門は、エネルギー・環境政策。

27年前に東北大学に勤めることになり、親子三人で仙台にきた。最初の数日は研究室に先に送っていた山積み段ボール箱の上に三人で川の字になって寝ることになり、かなり背中が痛かったのを覚えている。

今の川内北合同研究棟ができるまで、私を含めた数人は、片平キャンパスの東北大正門の近くにあった遺伝生態研究センター、略して遺生研と呼ばれていた古い建物に間借りしていた。

日本にも留学した私の叔父は、戦前の上海で出版社を立ち上げ、魯迅とは深い関わりがあった。片平キャンパスの魯迅像を見るたびに、両親や叔父が生きた激動の時代に思いをはせた（定年になったらその時代の上海と東京を舞台にした冒険小説を書こうと思っていたら、もう定年になってしまった）。正直に言うと、街中に近い片平キャンパスが、仕事をする（しない？）場所としてはベストであり、片平にいた同僚の先生も同意見であった。

これも懐かしい思い出だが、息子が5歳の時に、1年間ほど私が24時間面倒を見ることになり、毎日、大学に連れてきて、研究室の机の上に寝かせて、自分はパソコンをたたいていた。最初の頃、私が部屋を少し離れた間に、1人になって不安になった息子が「お父さんがいなくなった！」と事務室に泣き叫びながら駆け込んだこともあった（前川さん、覚えてます？）。

その頃にいらっしゃった栗林均先生にも、親子ともどもお世話になった。特に息子が栗林先生になつて、大学に来ると、ノックもせず栗林先生の部屋に飛び込んで、先生の膝の上に抱っこしてもらって、仲良くお菓子を食べながら画面を見ていた。

2011年の震災の時には、私は東京のビルの9階にいた。午後5時ごろ、一瞬、携帯が通じて家族の安否が確認できた。その後、1週間後にバスで戻れた。東京から支援目的で仙台に来た人と女川にも行き、案内してくれた人が、涙ながらに、実は家族が亡くなったと語った時の光景は忘れない。その時にひろった水産業者の名前が入ったしみだらけの段ボール箱の破片は今でも持っている。

迷惑をかける方が断然多かったが、「独自性」および「物理的」という意味で大学や学科へのささやかな貢献を無理やりあげるとすれば、工明会という環境科学科が参加する工学部の運動会で学科対抗リレーに出続けたことかもしれない（何人か抜いたこともある）。今年の運動会では、今ひとつ活躍はできなかったものの、フットサルにも出た。

研究に関しても少しだけ。私は、東北アジア研究センターには、中国の環境問題の研究者として赴任した。その頃の中国は「環境問題のデパート」と言われ、実際に、大気汚染、水汚染、砂漠化、地球温暖化、資源浪費など、何でも揃っている状況であった。したがって、「日本の先進的な環境技術によって中国のエネルギー・環境問題を解決する」というナラティブが政

策決定者だけでなく、多くの研究者の間でも共有されていた。

しかし、時代は流れ、今、中国は再エネなどのクリーン産業分野における覇権国となった。テクノヘゲモニーというのは、まさに今の中国に当てはまる。

もちろん、大気や水の汚染はまだ深刻であり、温室効果ガスの最大排出国であるのは事実である。しかし、その一方で、太陽光パネル、蓄電池、電気自動車は「新三種の神器」と呼ばれ、それぞれ世界の市場占有率は中国企業が上位を独占している。中国の再エネ導入量は圧倒的であり、国内市場でも新旧の企業が熾烈な戦いを展開している。そのような中国に対して、いわゆる西側諸国は、政府補助金、過剰生産、ダンピング、経済安全保障などを理由にして、中国のクリーン産業の勢力拡大に歯止めをかけようとしている。このような動きは、やはりダブルスタンダードだと思わざるを得ない。

今の私は、政策形成という意味でより影響力を持てる可能性がほんの少しはある日本のエネルギー・気候変動政策に関わることが多い。特に、震災後は、政府に対抗して、「原発や石炭火力発電所がない方がより経済的に好ましい」というメッセージを主とする具体的な代替案を出して、その経済効果を、一般市民に定量的かつわかりやすく示すのが自分にとって最重要な仕事と考えている。それが研究者として良い判断かどうかかわからないものの、変わろうとしても変えられない年になってしまった。

仙台では、仙台港の石炭火力発電所建設の差止要求裁判にも原告兼専門家として関わった。この裁判では、二酸化炭素排出よりも大気汚染被害が最大の争点になり、期せずして、東北大学における初期の仕事であった越境大気汚染問題を研究する過程で得た疫学的な知識や大気汚染物質拡散モデルを少し齧ったことが大いに役立った。しかし、テレビドラマとは違って、一番でも二番でも裁判官を納得させることはできなかった。さまざまな軋轢もあり、残念な思いだけが残った。

うまく行かなかったという意味では、東北大の経済学部や金研の先生らと一緒に、中国山西省での古い製鉄所の省エネ改修プロジェクトを国連が認可するクリーン開発メカニズム（CDM）として登録することも企てた。もし正式に登録されたら「排出権」としてウン億円が対象の製鉄所を含む関係者全体で得られる可能性があったが、最終的にはリジェクトされてしまった。金額の大きさという意味では、人生において一番の「損」だったかもしれない。

仙台では、良いことも悪いこともいろいろあった。ただし、東北アジア研究センターが私の人生の大半を豊かなものにしてくれたとは躊躇なく言える。青葉が繁り、紅葉が輝くキャンパスも好きだった。みなさんには、たくさんのご迷惑をおかけしたことをこの場で深く陳謝すると同時に、さまざまな出会いや縁をつくってくれたこと、そして何よりも、同じ場所で同じ時間を共有できたことに心から感謝する。



おか・ひろき ●早稲田大学第一文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程単位取得退学、博士（文学）。早稲田大学助手、日本学術振興会特別研究員（PD）、東北大学東北アジア研究センター助教授・准教授を経て、現在教授。専門は東洋史学、清代モンゴル史をテーマとしている。

私が東北大学東北アジア研究センターに着任したのは1996年8月1日である。そしていよいよ今年度をもって、定年を迎えることになった。私が大学に入ったのは1978年だから、46年前のことである。当時中国では文革が終わり、改革開放政策が始動していた。90年代になるとソ連圏社会主義体制が解体して冷戦が終了した。ロシアとモンゴルでは市場経済化と民主化が始まった。この国際政治の変動が、私の研究者人生に大きく影響した。私は歴史学、東洋史学を専攻し、モンゴルを研究テーマとしている。モンゴル人、あるいはモンゴル系の民族は、モンゴル国・中国・ロシアに分布しているのだから、これら三つの国との関係改善は、そのままモンゴル史の研究環境の劇的な改善を意味したのである。すでに1972年に日本との国交を樹立していたモンゴルとは、1974年に文化交流協定が締結され、留学生交換が始まっていた。私がモンゴルに留学したのは1981年秋のことである。私は社会主義体制の再末期の二年間を、「西側」からの留学生として、モンゴルで過ごしたのである。中国での開放政策の進展は、モンゴル史分野でも学術交流を活発化させた。私は博士課程在籍中の1987年から1989年まで、北京の第一歴史檔案館で史料調査をすることができた。モンゴルが民主化された90年代半ばには、モンゴル国立歴史中央アルヒーフが外国人研究者にも開放され、史料調査が可能になった。私はアルヒーフで史料調査を行い、その成果を博士論文としてまとめ、著書として刊行することができた。そのような中で東北大学に設立された東北アジア研究センターは、モンゴルも研究対象としていた。ここに職を得ることができたのは、まさに僥倖であった。着任後は、2000年にモンゴル科学アカデミーと東北大学の大学間学術交流協定の締結に関わり、これを用いて2003年から同アカデミー歴史研究所との協力で隔年で国際会議をウランバートルで開催し、やがて中国やロシアの研究者の参加も得た。東北アジア研究センターはロシア国立ノボシビルスク大学との大学間協定の世話部局になっていたが、2009年からノボシビルスク大学人文学部との協力で、日本・アジア研究を専門とする東北大学教員による現地での講演会「日本・アジア講座」や、学生の参加による仙台での「日露ワークショップ」を開催することができた。2020年からのコロナ禍は、こういった直接の交流を困難にしたが、代わりにオンラインでの国際会議が盛んに開かれるようになり、交流を維持することができた。この間、モンゴル国から北極星勲章を授与されたのは、望外（想定外？）の喜びであった。教育面でも日本人だけでなく、モンゴルや中国内モンゴルから多くの留学生を受け入れ、モンゴル史の研究指導に当たる機会を得た。卒業生の多くが、今各地の研究機関で研究者として活躍している。相互交流が進んだこの半世紀は、モンゴルを研究対象としている私にとっても、研究・教育両面で幸せ

な時期だったと言えると思う。

学生時代に、出来事というのは、50年は経たないと歴史にはならないと言われたことがある。それくらいの時間が経たないと、歴史として客観的に研究することが難しいという意味だったと記憶しているが、私の出発点だった社会主義国モンゴル人民共和国への留学からまもなく50年が経つ。センターの同僚の中でも、社会主義時代にソ連圏での長期滞在の経験を持つのは私だけである。モンゴルからの留学生たちにとっても、社会主義時代など先史時代のように思われるようだ。ノボシビルスクを訪れた時、自宅で社会主義時代の「遺物」を展示している市民の私設「博物館」を訪れたことがある。日本の民族学博物館でも、社会主義時代のモンゴルを再現した展示が出されていた。それらを見た時、自分自身が「歴史」に埋もれてしまうような、なんとも言えない妙な気分になったのだが、あらためてあの時のモンゴルこそが、私にとっての原風景なのだと思われたのも事実である。歴史的出来事にはいくつか遭遇した。モンゴルでの社会主義体験もその一つだが、その後1989年6月には北京留学中に天安門事件が起こり、2011年3月には仙台で東日本大震災を経験した。しかし歴史学者としてはふがいのないことに、私はいまだに「そこにいた」ことの意味を捉えきれずにいる。普段は客観的たろうと努める歴史研究者としての自分と、実際には歴史の中にいる自分との折り合いをつけるのは、意外に難しい。東北アジアは、今大きな転機を迎えようとしているように思われる。その歴史的意味が何であるにせよ、この地域が我が国にとって重要な意味をもつことには変わりはないだろう。東北アジア研究センターの今後のさらなる発展を祈りたい。

定年を迎えることで、研究者としての自分には一応の終止符を打つことになる。この間、実に多くの方々のお世話になった。一人一人のお名前を挙げることはしないが、無事定年を迎えることができたのは、ひとえにこれらの方々のお陰である。心から御礼を申し上げる。



北極星勲章受章式でモンゴル国エルベクドルジ大統領と（2016年8月）

『蒋介石日記』の「帰還」

上野 稔弘

中国研究分野／准教授



歴史研究は歴史資料すなわち史料の分析を基礎とするが、近現代史研究における史料は種類・形態が多様である上に分量もおびただしくなる。加えて史料へのアクセスという点で様々な政治的バイアスが存在し、近現代史研究が現在の政治・社会状況と地続きであることを実感させられることも多い。その一例として『蒋介石日記』（以下『日記』）をめぐるエピソードをここで紹介したい。

蒋介石は中国国民党の領袖として北伐以降の中華民国南京政府を率いた政治人物であり、その後の抗日戦争や国共内戦、そして台湾に拠点を移した後も晩年まで政治的影響力をおよぼした中国近現代史上の重要人物である。蒋介石はその波乱に満ちた生涯において日記を克明に記しており、その後台湾において編纂された資料にも断片的に引用されるなど、その資料的価値は認識されていた。ただし日記原本は長らく非公開であり、引用された日記の記述についてもその真偽を疑問視する声もあった。

こうした状況は2006年のアメリカ・スタンフォード大学フーヴァー研究所における『日記』の公開により一変した。これには国民党に代わって政権に就いた民進党が蒋介石の権威否定の運動を展開したことを不安視した蒋介石の遺族が『日記』を持ち出し、スタンフォード大に委託したという事情がある。台湾の民主化は思わぬ形で『日記』の公開をもたらしたのである。

これを契機に世界中の中国研究者による「フーヴァー詣で」が起り、筆者も数度にわたり閲覧の機会を得た。公開された『日記』は原本ではなく、マイクロフィルムに撮影された画像を複写困難な深緑色の紙に印刷し、月単位でフォルダーに収めたものが閲覧に供された。電子複写ならびに写真撮影



かつて故宮博物院前にあった蒋介石像（台北）。台湾各地の蒋介石像は近年撤去・移築が進んでいる。

は禁止で、閲覧室備え付け用紙に鉛筆での転写に限定された。入室時は筆記用具以外持ち込み禁止で、退出時には所持品検査があった。また当初は引用に際してもフーヴァー研への申請と蔣家の許諾を必要とした。後日耳にしたところでは、こうした措置の背景には中国大陆側から人海戦術で『日記』を全文転写し出版される事態への警戒があったらしい。そうした疑念の真偽はともかく、日本を含むアジアの研究者が『日記』に寄せる関心の高さの一方で、タイトな渡米日程の中で筆写する効率の悪さは確かに存在した。

『日記』は一読してその内容の重要性が分かるものであり、毛筆による蒋介石の筆跡は特徴的ではあるものの可読性は高い。ただしフーヴァー研ではレターサイズ用の紙に2ページ見開きの形式で提供されたことで字が小さく、加えて大戦末期には日記帳の規格に記述が収まらず、行間や欄外にまで書き込みがあり、これらのさらに細かな字はかなり目を近づけないと読めないほどで、実に閲覧者泣かせであった。またそれ以外にも日記帳の紙質が薄くて裏面と字が重なり判読できない箇所、さらには浸水で生じた墨汁の滲みや紙の腐食が生じた箇所は、フーヴァー研が提供するモノクロ画像ではほぼ判読不能であった。『日記』の閲

覧は研究に大きな収穫をもたらしたが、こうした箇所の存在には隔靴搔痒の感があった。

その後台湾での政権交代を経て蒋介石批判運動が沈静化したことを背景に、『日記』の台湾への返還に向けた動きが進み、蒋介石遺族間の相続権をめぐる懸案が生じたものの、2023年9月に空路台湾へと「帰還」した。現在『日記』は台湾の歴史研究機関である國史館にて補修が進められており、2024年9月末より息子である蔣経国の日記と共にデジタルアーカイブとして原本画像の公開が始まった。現時点で公開されているのは1920年代の数冊分であり、國史館の台北分館での閲覧に限定されているが、1930年代以降の分についても今後段階的に公開されてゆくようである。また1949年以降の台湾転移後の部分については活字本として出版が進んでいる。研究者からの関心が高い1940年代分の公開はまだ先になりそうだが、スタンフォード大での公開では判読困難だった箇所を改めて閲覧できる機会の到来が待ち望まれる。



活字版『蒋介石日記』（「中正」は蒋介石の別称）



網走にて

Konstantinos Zorbas

客員准教授
[2024.9 ~ 2024.12]

コンスタンティノス・ゾルムバス
▶ケンブリッジ大学博士号、セントアンドリュース大学文学修士号。
中国山東大学人類学准教授。ロシアのトゥヴァ共和国、中国北東部におけるシャーマニズムに関する実地調査を実施。

中国北部の民族博物館とシャーマニズム復興

中国北東部の民族博物館は、先住民の宗教遺産の保存・展示において重要な役割を果たしています。私のプロジェクトは、満州文化を専門とする博物館に焦点を当て、北アジアにおけるシャーマニズムの宗教の持続力の解明を目指します。こうした博物館は、中国北部の満州族およびモンゴル族の儀式用の工芸品や衣装といった膨大な収蔵品を特色とし、当該地域の多彩な精神的伝統を紹介しています。吉林省の国立博物館、および正式指定を受けている「満州族の郷」における実地調査に基づき、起源や言語系統などで分類された民族集団間の、地域間および国境を越えた象徴的・文化的な類似性解明とそのため民族誌学的方法の構築に取り組んでいます。

本プロジェクトでは、民族学的に先駆

的な民族区分（例えば、ソビエト・ロシア民族学におけるエトノス理論）を考慮しつつ、民族・政治・国家の境界線を越える「文化的通貨」として機能するシャーマニズムの象徴物を、現代の宗教実践者がいかに再編するかを探ります。異文化間の相乗効果の分析では、モンゴル、ロシア、中国の民族を国境を越えて結びつけるモンゴルのシャーマニズムに関する日本の人類学的研究に用いられている概念的手法を採用しています。将来的な目標は、東北アジア研究センター（CNEAS）により現在開発中の民族誌学関連データベースの一部として共同デジタルアーカイブを構築し、北東アジアにおける文化的変化の原動力に関する理解を促すことです。

REPORT

最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか

合同セミナー

アークス2日本・フィンランド合同セミナー



佃麻美

(学術交流分野/学振特別研究員(特任研究員))

会期 2024年9月5日～6日

会場 Arctic Centre, University of Lapland "Thule" seminar room (Finland, Rovaniemi)

9 月5日と6日の両日、フィンランド・ロヴァニエミにあるラップランド大学北極センター（Arctic Centre, University of Lapland）のThuleセミナー室を会場に、表題のセミナーが開催された。このセミナーは、東北大学東北アジア研究センターの高倉浩樹教授と北極センターの人類学チームがコーディネートする研究者交流プログラムの第4回目にあたり、プログラムにおける最後のセミナーであった。「北極圏における人と食の移動がもたらす影響」をテーマに、北極センター側からは6名、日本側からは5名が研究発表を行った。日本からは東北大学に加え、国立民族学

博物館、神戸大学の研究者も参加した。冒頭、高倉浩樹東北アジア研究センター長と北極センターのFlorian Stammer教授が挨拶を行った。各報告では、食習慣とアイデンティティや食品安全、食文化の変化、外来種の導入、グローバルサプライチェーンにおける先住民の毛皮や毛の取引、トナカイ飼育の現状、観光における人の移動といった食文化や経済にかかわるものから、シベリアでのフィールド研究における現地の人びととの協力関係やロシア・ウクライナ戦争に関連するシベリア先住民の移動といった問題まで、多様なテーマが議論された。本セミナーを通じて、モノや人・動物の移動が

地域社会に与える影響が具体的な事例を通して明らかにされ、どのような地域交流が双方にとって望ましいかを考える機会となった。



発表する高倉浩樹教授（右奥）

東北アジア研究センター特別講演会／第22回支倉セミナー

予期せぬ隣人—イデッシュ文学からみえてくる日本人



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野／教授)

会期 2024年9月25日

会場 東北アジア研究センター (ハイブリッド)

2 024年9月25日に東北アジア研究センター客員教授のベル・コトレルマン氏による講演「予期せぬ隣人—イデッシュ文学からみえてくる日本人」(英語)が行われた。20世

紀初頭にソ連は対日本との緩衝地帯と言うことも含めて、アムール川中流域にユダヤ人自治州を建設したが、そこで刊行されたイデッシュ語の文献あるいはそこで暮らした人々が残した記録からみえてくる20世紀前半のロシア極東・帝国日本を含む東北アジアの歴史に関する報告だった。ユダヤ人自治州に入植した人々は、満州国の日本人、あるいは戦後のシベリア抑留の日本人との接触があり、それを様々な形で記録に残してきたのである。ユダヤ人の隣人として帝国日本が存在したということを私は意識したことがなく大変刺激的な報告だった。これに対し赤尾光春氏(国立民族学博物館)は、ユダヤ研究の専門家として、コトレルマ

ン氏の発表の背後にある歴史や満州における帝国日本のユダヤ人との関係にも触れるコメントを行った。満州国においてもユダヤ人入植を奨励する計画があったからである。ここにはソ連・日本双方において緩衝地帯としてユダヤ人を利用しようとする意図があったことがわかる。この討議を聞く中で、20世紀前半の東北アジアの民族関係史には、この土地に歴史的に暮らしてきた土着の諸民族と、ユダヤ人さらにスターリン時代の朝鮮韓国系の人々の強制移住を含めた動的な側面に注目する必要性が示唆された。先住民と国家の主流民族に加えて様々な形の移民の関係性が東北アジアの歴史を形作っているからである。



熱心に討議する赤尾氏とコトレルマン氏

宮城第一高校学術機関研修

宮城第一高校研修企画



根本みなみ

(上廣歴史資料科学研究部門／助教)

会期 2024年9月27日

会場 東北アジア研究センター

東 北アジア研究センターでは昨年度に引き続き、宮城第一高等学校の研究所・学術機関研修として、国際探究科・理数探究科1年生82名の訪問を受けた。この研修企画は、センターの研究活動、文理融合研究や文系分野に対する理解促進に寄与することを目的として開催されており、その趣旨を踏まえて本年は文系・理系あわせて8研究室が参加した。

当日は、高倉浩樹センター長より東北アジア研究センターの来歴や活動・研究内容について説明があった。その後、生徒たちは各グループに分かれ、センター内の研究室を訪問した。研修企画に参加した研究室では「歴史はなぜわかるの

か？」や「東北アジア多民族社会の現状と課題」、「アジアにおける戦争記憶の現在」、「東北アジアや世界から見た時の、日本の自然(生物相)の価値は何か？」など歴史学や生物学など研修企画に参加した教員の専門分野にかかわる多様な話題が提供された。研究室を訪問した生徒は事前に調べてきた内容も踏まえ、教員の研究内容や大学教育について積極的に質問を行い、大学での教育や研究の内容について理解を深めていた。

後日、参加した生徒からは「大学に行ったらこのような研究が行えると思うとわくわくする」「理系に進むから自分には関係ないと切り離すのではなく、どんなことも一度向き合い面白さを見つけ

ることが勉強を楽しむことにつながるのだと思った」「地域研究を行う上で文系と理系が壁を越えて協力し活動しているのが面白いと思った」「研究者は自分の専門分野に加え異なる専門家と共同しながら現在の問題を解決・分析するために研究をしているということを知れた」など、自身の学習や将来の進路選択なども見据えた感想が多く寄せられ、研修企画の趣旨が十分に理解されたことが確認できた。

南シベリアの宗教と映像をめぐって

CNEAS 人類学研究会



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野／教授)

会期 2024年10月22日、10月29日

会場 東北アジア研究センター(ハイブリッド)

東

北アジア研究センターでは現在、二名の外国人研究者がシベリア研究を行っている。一人は、客員准教授のコンスタンチノス・ゾルバス先生(中国・山東大学)で、もう一人

は日本学術振興会外国人特別研究員のビクトリア・ピーモット先生(ヘルシンキ大学)である。この機会を利用して、10月に2週連続で特別講義を御願した。

10月22日は、ゾルバス先生による「Spirits and Spiritual Governmentality: Unraveling the State's Shamanic Extensions in Northeast Asia」という題目で発表があった。ここではロシア連邦トワ共和国のトワ人社会におけるシャマニズムが取り上げられ、特にトワ人の政治エリートとの結びつきという新しい現象についての説明とその意義について解説された。社会主義体制崩壊のなかで民間医療としてのシャマニズムの復活現象は様々な研究者がとりあげてきたが、政治現象との結びつきはこれまで

報告が無く、宗教の新しい役割が発生していることがわかった。

10月29日には、ピーモット先生による「Photographic Homecoming: Relationships and Senses Beyond the Camera Lens」という応用映像人類学に関わる発表があった。20世紀初頭のトワ社会の地誌・民族誌など学術資料がノルウェーなど北欧の大学や博物館に所蔵されている。それらの写真資料を元々のトワ共和国の地域社会にもっていき、そこでの現地の人々の反応を踏まえながら、新しい民族誌的知識を現地の人々とともに作り出す過程を報告した。彼女は、トワ共和国出身の人類学者であり、これらの写真は其の故郷が撮影されたものなのである。研究資料を現地社会の文化財として評価しなおすアプローチであり、同時にそれが現地の人々との協働で行うことの意義を考察するものだった。

いずれの研究会もオンライン併用で行われ、海外からも含めて参加者があり、充実した討論が行われた。



10月29日の研究会

山元町歴史民俗資料館第69回企画展

歴史資料が語る近世・近代の社会 - 大條家文書・坂元村記録の調査から -



竹原万雄

(上廣歴史資料学研究部門／助教)

会期 2024年10月25日～2025年1月13日

会場 山元町歴史民俗資料館

上

廣歴史資料学研究部門では、山元町歴史民俗資料館と協働し、令和元(2019)年より江戸時代に当地を治めていた大條(おおえだ)家の歴史資料と、明治以降の行政文書である坂元村記録の調査を進めてきた。本企画展では、その研究成果を紹介した。

大條家の資料からは、大條氏の系図などを含めた「家の歴史」、伊達政宗黒印状などから主君伊達氏との関係、大條氏が本拠とした坂本要害(城)や城下町の絵図などを取り上げた。貞享4(1687)年の絵図では、家中屋敷が拡大し、城下では道路の整備が進められており、それ以前の絵図と比べると田地を侍屋敷に転用していることもわかる。江戸時代を通じて

都市化・宅地化していく動きがみられた。

坂元村記録からは、明治38(1905)年の大凶作と翌年の火災をめぐる救済活動、大正・昭和初期の坂元の村治民育に関する重要事項が掲載された『坂元月報』について紹介した。救済活動では、米・乾野菜・小麦粉・蕎麦・黒パン・馬鈴薯・里芋・味噌・醤油といった食料品、衣類・毛布、児童の学用品などの物品が配布されていた。坂元村記録には、こうした配布物品の受領証が数多くのこされており、地域の復興過程に多様な救済活動があったことを伝えている。

11月10日には、関連企画として「講座：地域の歴史を学ぶ◎山元 江戸・明治時代の坂元」と題し、野本禎司先生(開

智国際大学教育学部准教授)と筆者による講演会も開催した。本企画展を通して、近世・近代の坂元の歴史を語る資料の魅力を知っていただき、当地の研究がより活性化することを期待したい。



企画展のポスター

カナダ・ラブラドル半島トーンガット山脈 国立公園における野外調査について

吉田聡

(地質研究資料アーカイブと試料
キュレーティングユニット/学術研究員)



私は2016年から、カナダ・ラブラドル半島サグレック岩体に産する世界最古(約39.5億年前)の炭酸塩岩を用いて古海洋組成を復元する研究に携わってきた。コロナ禍の影響を受け、調査が数年間途絶えていたため、私は同地域での野外調査には今まで参加することがなかったが、今年の8月にその調査に初めて同行することができた。近年の円安の影響などで従来30～40日行っていた調査は8日間に短縮されてしまったが、初期地球表層環境の復元を目標に、充実した調査を行うことができた。拙稿ではその調査地での生活と調査の意義について簡単に報告する。

滞在したラブラドル半島のトーンガット山脈国立公園に設営されたベースキャンプは、観光、教育、研究施設として、夏季のみ数十人が常駐する居住区である。食物などの生活物資は、基本的には数十キロ離れた村であるグース・ベイやホープデールからの空輸に頼っているが、ベースキャンプ付近の入り江ではホッキョクイワナ

(Arctic char) がまさに入れ食い状態であり、釣果が頻繁に食卓に並んだ。ちなみに、調査地の年代を制約する世界最古級の年代を示す花崗岩質片麻岩であるイカルック(Iqaluk)片麻岩は、ホッキョクイワナの内名であるIqalukに準えて命名された。調査地には、ホッキョクグマやアメリカクロクマ(くまのプーさんのモデルにもなった比較のおとなしい熊ではあるが、当地域に生息する個体は大きく、気性も荒いことで知られる。)が生息しており、居住区の周囲に張り巡らされた電気柵外での調査には必ず専門のクマ撃ちが同行する必要がある。ちなみに、この地域ではホッキョクグマは神格化されており、クマ撃ちが止むを得ずホッキョクグマを射殺した場合には酋長に報告し、一定期間復讐できないらしい。調査中には、実際にホッキョクグマが200～300mの位置まで接近する場面や、クロクマと50mほどの位置で対峙する場面もあり、肝を冷やした。それゆえ、我々の研究グループお得意の長距離・長時間

調査は鳴りを潜めた。

当地域に分布する表成岩(地表で形成・堆積した岩石。花崗岩などの深成岩と区別される。)は、地球最古の形成年代を示す点、地質学的な産状に基づき形成場を遠洋域と大陸縁辺域に分類可能な点、そして地球最古の生命の痕跡が産する点から極めて高い希少性を有する。そのため、当地域に分布する海洋性炭酸塩岩は、地球形成後間もない頃の海水組成を記録する第一級の地質記録と言える。近年は、当時の海水中の生命必須元素組成の復元や、初期生命の種類やその代謝経路を探索した研究が報告されつつある。しかし一方で、形成後40億年にわたりプレートテクトニクスなどの熱的なイベントや、風化作用に晒されてきたため、試料から形成時の初生的な組成情報をいかに復元するかが大きな課題となっている。今回の調査では、上記作用を免れた岩石や、新たな生命活動の痕跡を探すべく詳細な露頭観察が行われ、新露頭や生命の関与を思わせる組織を含む岩石の発見など注目すべき成果が得られた。この試料をもとに、この東北アジア研究センターから地球史と生命史に関して重要な報告をしたい。



1: 調査の様子。居住区を遠方に臨む。

2: 世界最古の海洋性炭酸塩岩露頭にて。右下はこの地域から見つかった生命の痕跡とされる有機物(Tashiro et al., 2017)。

編集後記

今号には今年度で定年を迎えられるお二人からご寄稿いただきました。そこには東北大での想い出とともに、研究対象とした地域で起こった大きな変化についても述べられています。ここ数年、世界では衝突と破壊が拡大・激化しています。これらの出来事は数十年後にどのように語られているのでしょうか。(後藤章夫)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第103号

2024年12月24日発行

編集: 東北アジア研究センター広報情報委員会
発行: 東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

